

# 第14回日本臨床中医薬学会学術大会

## The 14<sup>th</sup> Annual Conference of Japan-China Joint Society for Clinical and Traditional Medicine

主催者：日本臨床中医薬学会

日 時：平成 27 年 9 月 29 日

場 所：パレブラン高志会館（富山市）

### 目的と研究集会の概略

**【目的】** 漢方医学や中医学を中心とした相補代替医療が西洋医学を補完するだけでなく、疾患によっては必須の医療となりつつある現在、西洋薬と同じ土俵で漢方薬や中薬による医療に科学的検証を加え、エビデンスに裏打ちされた医療応用を確立することが求められている。

このような背景を踏まえ、本学術大会は、我が国における漢方薬の EBM 構築や臨床研究に関わる医師、臨床研究社、基礎研究者は固より、漢方医学の原典となる中国医学の臨床医及び中薬研究者が一堂に会し、その先端的研究成果を持ち寄り、漢方薬や中薬に関する最新の情報や新しい知識を共有することを第一義の目的とする。また漢方薬や中薬の科学的検証や臨床的エビデンスに関する議論や情報交換を通じて伝統薬の有効性や課題を把握・理解するほか、西洋薬での治療が困難な疾患への伝統薬応用等に関する最新知識の共有を企図した。

**【概略】** これらの目的を達成するために、本大会では、特に「高齢化社会で担う伝統薬の役割とその近未来予測」をメインテーマに、「高齢化社会が抱える疾患の予防・治療・緩和に漢方薬や中薬がどのように貢献できるのか」、「どのような疾患に応用可能なのか」に焦点をあて、伝統薬の担うべき役割と今後担える役割について科学的理解を深めることを目指した。

大会では中国における中医薬の基礎・臨床研究者 15 名と我が国における漢方薬の基礎・臨床研究の最前線で活躍されている先生方 45 名が一堂に会し、上記テーマに沿った講演、シンポジウム並びにポスター発表を行った。講演としては特別講演 3 題を果徳安 中国科学院上海薬物研究所所長、溝口和臣 ツムラ研究所主任研究員、および池島喬 瀋陽薬科大学教授の 3 名にお願いし、それぞれ丹参とその成分、抑肝散、および伝統薬が働く場としての細胞外マトリクスについて系統的に研究成果を紹介戴いた。教育講演では、韓 晶岩 北京大学医学部教授に「気行血」という中薬・漢方医学で重要な概念をエネルギーとしての ATP 産生と酸素消費の観点で、微小管循環を例に講演を戴いた。

シンポジウムでは 2 つのセッションを設けた。シンポジウム 1 では現代社会および高齢化社会が抱える問題疾患である認知症、うつ、軽度発達障害を取り上げ、それらの疾患に対する漢方薬や中薬の有効性に関する研究発表があった。またシンポジウム 2 では、がんや炎症性疾患等を対象にそれらに対する天然薬物成分と分子作用機序に関する研究成果の発表があり、何れのシンポジウムでも参加者との活発な討論がなされた。さらにポスター発表では来日できなかった発表者 5 名の演題取り消しがあったが、日中両国の若手研究者により 9 題の発表が行われ、活発な討論を行うことができた。

本学会は基本的に日本人研究者を対象としているが、日中両国からの研究者が参加することから、参加者の理解を深める上で共通の科学用語として英語での講演と質疑応答も行われる特徴があり、

国内学会とは言え、国際的情報発信にも寄与することができたと言えよう。

本大会で中国から参加された研究者の多くは、本学和漢医薬学総合研究所から数多くの中国出身研究者を育成し、伝統薬研究機関に多くの教授を輩出していることを熟知していた。この理由から、富山大学の支援で企画された本大会には中国から多くの参加者を得ることができた。今後の交流や共同研究への発展につながって行くと期待される。

#### 和漢医薬学の科学的基盤形成および関連研究者コミュニティ形成への貢献

中国の中薬研究者および我が国の漢方薬基礎研究者を中心として研究発表では、中薬や漢方薬をはじめとする複合系薬物の有効性を臨床応用するために得るべき科学的エビデンスについての議論がなされた。またこの領域で研究をリードし、中薬の国際化を推進している果徳安教授からは、その特別講演の中で科学的エビデンスについての言及があり、有効成分を基準とした生薬の標準化、有効成分のバイオアベイラビリティ等のデータ取得の重要性が強調された。一方、今日、認知症周辺症状の治療における有効性に科学的エビデンスが蓄積されている抑肝散については、溝口和臣博士から詳細の作用機序が報告され、中国からの参加者に大きなインパクトを与えるとともに、大規模な高齢化が進行している中国の医療への応用性に注目が集まった。このように複合薬物の有効性、作用メカニズムや有効成分についての最新研究成果が発表され、情報交換がなされたことは、医学・医療の一層の発展と和漢医薬学総合研究所がめざす伝統医薬の科学的基盤の構築に大いに役立つと期待された。

本大会では韓昌岩 北京大学医学部中西結合系教授を中心に、中国から20名の中薬・中医領域研究者が参加し、講演や質疑応答は日本語若しくは英語で行ったので、伝統薬の基礎及び臨床研究の最新情報を効率的に交換することができた。またこのような発表形式を取ったことにより、日中両国の研究者の相互理解が深まり、医薬学交流や共同研究の更なる促進にも繋がることと期待された。これによって研究者コミュニティを国内に留まらず、日中両国に広げて行くための橋渡しや切っ掛けとなったことから、本学術大会を富山で開催したことの意義は大きいと思われる。

#### プログラム（抄録集参照）

9：00 開会の辞

9：10 特別講演1 座長：山田 陽城（東京薬科大学・教授）

演者：果 徳安（上海薬物研究所所長・教授）

「Salviamiltiorrhiza: from the field to the bedside」

9：50 特別講演2 座長：松本 欣三

演者：溝口和臣博士（ツムラ研究所・グループ長）

「Neuropharmacology of yokukansan for behavioral and psychological symptoms of dementia」

10：50 シンポジウム1 「現代社会・高齢化社会で役立つ伝統医薬の研究最前線」

座長：陈 乃宏、松本欣三

12：05 昼食・ポスター閲覧

13：00 ポスターディスカッション

13：40 教育講演 座長：雨谷 栄（日本薬科大学・教授）

演者：韓 晶岩（北京大学医学部・教授）「気行血の科学根拠」

14：10 シンポジウム2 「漢方薬・中薬の臨床効果を裏打ちする作用機構、作用分子」

座長：早川芳弘、池島 喬（瀋陽薬科大学・教授）

16：15 特別講演3 座長：済木 育夫

演者：池島 喬（瀋陽薬科大学・教授）

「Extracellular matrix (ECM) affects cell function such as response to drugs including cytokines and natural drugs」

16：55 閉会の辞

参加者数	研究所	：19名（うち、学生 5名）
	国内（所外）	：19名（うち、企業関係 5名）
	国外（中国）	：20名

#### その他特記事項

参加者は100名程度を想定していたが、58名であった。また中国からの参加者は、当初30余名を予定していたが、ビザ取得上のトラブルや所属大学からの出張許可基準の変更があったため、10名が参加をキャンセルした。しかし、日本語と英語を交えた活発な討論がなされ、両国の伝統薬研究者間に新たな共同研究や研究者交流をはじめていく為の交流の場ともなったことから、本大会開催の意義の一つとして自己評価したい。